

農に生きる

Challenge to
My Dreams



散布前にドローンの説明を受ける
岩田さん(中央)



8月から9月にかけて稲刈り作業
(撮影のためヘルメットを外しています)

米生産者

いわた みつはる
岩田 光晴 さん(76)

富士宮市青木在住。水稻を50アール、畑作を50アール管理し、旬の野菜をファーマーズマーケット「う宮～な」に出荷。JAふじ伊豆^{みやこめ}う宮米生産販売協議会会長を10年務めている。

日本の“米食”文化を未来へ紡ぐ

おいしさを支える 品質を探究

岩田さんは、会社員として37年間勤めた後、代々続く実家の農業を継いで20年目を迎えます。葉タバコやイチゴ栽培を経て、現在は季節ごとの野菜や富士宮市産「う宮米」を栽培し、消費者ニーズに沿った品質を追求しています。

「農業をする中で、会社員時代に行っていた生産管理や品質管理が生きている」と話す岩田さん。毎年結果が出る米の成分分析表から改善点を見つけ、次年度の栽培に反映させています。

さらにJAの土壌診断や栽培管理

マニュアルを基本としながら、長年の経験と気象条件を考慮した独自の工夫をプラスすることで、さらなる品質向上につなげています。

“一粒”に込めた思い

近年の異常気象や生産者の高齢化など、中山間地域での農業継続は年々厳しさを増しています。岩田さんは昨今の米情勢を振り返り「米の価格が上がっても、生産資材の高騰で生産者の負担は重く、次世代への継承が危ぶまれる。消費者の皆さまには農産物の『適正な価格』について改めて考えていただき、国や行政には未来を見据えた支援や政策を願う」と訴えます。



みやこめ
う宮米

富士宮地区では平成16年にう宮米生産販売協議会を立ち上げ、富士宮市産米のブランド化に取り組んでいます。生産履歴の記帳を徹底し、食味分析計や色彩選別機で品質を追求。上位の食味基準に達した順にランクを分け、う宮～なで精米したてを販売している他、学校給食にも使われています。

「どんな状況でも、いつでも・どこでも・誰にでも適正価格でおいしいお米を届けたい」という強い思いを胸に、日々おいしい米作りと安定供給に励む岩田さん。「消費者の皆さまに地元産米を選んでいただくことが、私たち生

米作りの未来

産者の大きな力となり、何よりの励みになる」と力強く話しました。

岩田さんは、本年度JAや市によるドローンを用いた農薬散布などの費用助成事業も積極的に活用しています。

「ドローン散布は無駄なく的確に散布でき、効率的で労力軽減になる。これまでの経験に加え、新しい技術を取り入れながら、時代に合った栽培方法で継承していく」と意欲的に取り組んでいます。米作りにかかる情熱と消費者とのつながりを心から願い「地域で協力して作る高品質な米が、地域の未来を支える付加価値になる」と笑顔で話しました。

営農アドバイザーから

富士宮営農経済センター 地区営農課

ふなやま ゆうき
船山 祐希

岩田さんは、常に高みを目指す栽培管理で、富士宮地区の米作りをけん引する存在です。水稻の大規模経営が困難な地域におけるブランド化のアイデアを積極的に提案してくれます。

JAは育苗から販売までを一貫して行い、地元企業と連携し行政との協調助成によるドローンでの施肥・防除支援事業に取り組んでいます。今後も地産地消を念頭に「う宮米」のブランド力向上に努めます。

